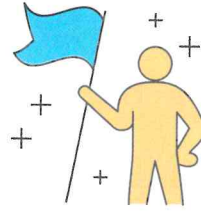


労働組合の理念に立ち返る ～つながりをつくることの意味～



枝廣 淳子 氏

大学院大学至善館教授
株式会社未来創造部代表取締役
幸せ経済社会研究所所長

これまで労働組合が向き合ってきた「働く」や「つながり」。このセッションでは、アル・ゴア元米国副大統領（ノーベル平和賞受賞）の『不都合な真実』の翻訳者でも知られている枝廣淳子氏をお迎えして、「人と人がサステナブルに働くことや、つながることの意味」について、考えました。今回は、講演内容の一部をご紹介します。

■ “生活世界” と “システム世界”

労働組合の大きなキーワードが「つながり」です。私自身のライフテーマもつながりなので、その辺の話をさせていただきま。これまでに多くの方々のカウンセリングをしてきて強く実感したのは、「人は大事なもののつながりが切れたときに大変な状況に陥る」ということです。環境問題に関する活動を始めたときも「人は地球とのつながりが切れたときに環境問題を起す」ということを感じました。社会の問題も同じです。

そこで、同じ大学で教鞭をとっている宮台真司氏と野田智義氏による共著『経営リーダーのための社会システム論』から大事だということをお伝えします。それは、“生活世界”と“システム世界”という二つの世界があるということです。生活世界とは、地元の商店街的なイメージで顔や名前が分かっているもの。もう一つはコンビニエンスストア的な、互いの顔が分からず個性をあまり持たない交換可能なシステム世界。今、システム世界は拡大してきています。

労働組合というのは生活世界に近い存在で、人間関係がベースにあり、お互いに顔が見えます。しかし、システム世界が強くなっている企業も多いのではないのでしょうか。システム世界は流動性が高く、自分が入れ替え可能な存在になってしまう——これが一番の問題です。人は自分が代替可能だと思うときに、自分の存在が棄損され、非常に辛いと感じます。今、企業で辞めたりメンタルの問題を抱えていたりする人が多くなっているのも、このような事象が関係しているのだと思います。

労働組合は、生活世界とシステム世界をつなぎ、生活世界的な人間性をキープできる場として存在している。私はこれがとても大事だと思っています。



■ VUCA 時代に重要となる 「レジリエンス」

不確実で複雑で、先を見通しにくい状況を表す“VUCA”と呼ばれる時代に私たちは生きています。こうした状況に立ち向かうキーワードが「レジリエンス」です。レジリエンスというのは、一般的に回復力や再起力、弾力性というように訳されますが、私は“しなやかに立ち直る力”という言葉に訳しています。

VUCAの時代において、個人にとっても、企業という組織にとっても、労働組合にとっても、レジリエンスは本当に大事になってくるでしょう。いつ何が起こるか分からない世界の中で、どんなことが起こっても立ち直れる力を身につけておかなければなりません。

分かりやすいのが竹や柳のような“しなやかさ”です。大変なことを受けてしので立ち直るという強さを持つことが必要ですし、労働組合がそれを育めるような存在になり、一人一人を支えてほしいと思います。

■ レジリエンスにおける三つのポイント

レジリエンスの専門家や研究者が挙げている共通項が三つあります。

一つ目が「多様性」です。会社だけではなく家庭・地域での役割を持っていれば大変な事態になってもしのぐことができるでしょう。二つ目が「モジュール性」です。これは普段は全体とつながっているけれど、いざというときには、スタンドアロンでモジュールのように機能すること。三つ目は、「緊密なフィードバック」。何か大変なことが起きそうなときに、いち早くそれを察知できますか？ 察知するだけでなく、正しく意思決定者に伝わっているか？ ということです。

この三つのレジリエンスを育むことを会社組織ができないとしたら、労働組合がその役割を担う。もしくはバランスを取って、三つのレジリエンスを大事にするような存在であることが重要です。

■ 労働組合は、幸福を高める プラットフォームに

日本人は、安心感や親しみが幸福につながりやすい気質を持っています。ですので、生活世界を大事にする労働組合であれば、日本的な幸福を支えることができると思っています。

労働組合は企業経営に対峙するというイメージも根強いですが、そうではなく、職場を通じて幸福を感じられる、幸福を高められるプラットフォームであるべきでしょう。それが今、労働組合に求められている社会からの要請であり、新たな定義もしくは役割となりうると考えています。

